

家庭愛和は真劍勝負

上 廣 榮 治

夏休みのシーズンであります。皆様におかれましても、お盆休みの帰郷や家族旅行を通じて、ふだんに増して家庭愛和の実を秘らせていらつしやることでありましょう。しかし、その一方で、近年のこのシーズンは、子どもたちの非行行動が取り沙汰される季節であることも、また事実です。

なぜそうしたことになるのでしょうか。夏休みがいつもと違うのは、学校の目が届かないということだけですが。しかしその分、親の目は他の季節より、より濃密に子どもたちに届いているはずですが。とすれば、残念ながら夏の非行の増発は家庭のあり方に原因がある、と言わざるを得ないことになりそうです。

この夏のはじめ、中央教育審議会が一年間に及ぶ審議の結果をまとめて発表しましたが、その中で私の目をひいたのは「**一家団欒の食事**」のすすめでした。食事を共にして、子どもをよく観察し、子どものストレスや悩みを芽のうちに摘み取れということです。まことにものともな指摘です。

しかし考えてみると、食事を共にするなどということは家庭生活の基本です。それを、事あらためて

中教審から教えられなくてはならないまでに、日本の家庭は崩壊してしまったのででしょうか。

食事さえ家族と一緒にでないのなら、その他の時間の過ごし方は大方知れています。自分の部屋に閉じこもっているか、大人の目が届かないところで仲間と一日を過ごししているのです。

「小人閉居こじんびやくして不善をなす」と申しますが、人間というものは一人で閉じこもっていると、ろくでもないことを妄想したり行なったりするものです。仲間だけで閉じこもっている場合も同じです。神戸のA少年も、あのサリン教団の信者たちも、一人で、あるいは集団で孤立し、「閉居不善」をなしてしまつたのです。大人の目が届かないところに閉じこもる夏休みの子どもたちの危うさも、また同じです。

それにしてもなぜ、子どもたちは家族と一緒に食事をしたがらないのでしょうか。先生や大人たちを避けるのでしょうか。子どもたちが大人を嫌い、孤立したがる原因を解決しないかぎり、子どもが食卓に戻ってくるとは思えません。

子どもたちが、孤立したがる傾向は、早い子で小学校の高学年から中学校のはじめにかけて表われます。それはちょうど、自立に向けて歩み出す時期でもあります。このとき、子どもたちは大人と自分たちの間に距離を感じはじめ、両親や先生に「自分とは違う何者か」を発見しているのです。

その「自分とは違う何者か」が、彼らにとって「嫌な存在」であるとき、彼らは親や先生によって代表される大人の世界、つまり社会に背を向けます。孤立の道を選び、反社会的な行動に走るのです。一方、「自分とは違う何者か」が、憧れ尊敬するに足る者である場合には、彼らはこれを目標として、よりよい自我を作り上げようといたします。

では、子どもにとって「嫌な親」とは、どのような親なのでしょう。答えははっきりしています。子どもの訴えに耳を貸さずとしない親。著の上げ下げからはじまって、四六時中小言を言う親。自分の

言い分だけを強制する親。つまり、自分を理解してくれず、一方的に何事かを押しつける親。それが子どもを孤立させる親なのです。子どもは親に自分を正視してほしいのです。

大人にも「話ができない相手」というものがあります。何かを言いかけると、同髪を入れずにこちらの意見を否定する人。自分のしたい話しかない人。こちらの生殺与奪の権を握っていて、それをかさに着て我を通す人。こうした人は、できれば顔を合わせたくない「嫌な人」です。

しかし、実際には多くの親が子どもにとって、こうした「嫌な人」である場合が多いということに、親はどれだけ気づいているでしょうか。親は子どもの生殺与奪の権を握っています。子どもたちは、そのことを本能的に知っています。その親が、勉強しなければ……、そんなことをすると……、「小遣いをあげない」「家におかない」と言えば、彼らは口を閉ざすしかありません。

たいがいの親が、子どもの言い分を聞く前に、自分の話を押しつけます。抵抗すれば叱ります。愛しているから叱るのだというのには親の理屈です。納得していかない子どもたちは、「嫌な親」から不当な迫害にあっていると感じます。やがて子どもは親を避け、「孤食」したがるようになっていきます。

中教審のいう通り、「一家団圓の食事」は「家庭の教育力の回復」のためには、きわめて有効な手段です。しかし、いったん親の強制から逃れて孤立を選んできた子どもたちには、一緒に食事の席につくように強制したとしても、彼らがその強制に素直に従うとは思えません。

では、どうしたらよろしいか。まず、親自身が子どもに対して、しっかりと問合いを取って対峙する習慣をもつことが大切です。気分で子どもを叱ったり、めりはりなく小言を言ったりしないことです。その反対に、安易に子どものがままを聞き入れてもいけません。ちょうど剣道の試合のように、正面から相対し、互いの剣尖が触れる程度の距離を保って、真剣に相手の目を見て対峙するのです。

剣道では、相手の仕掛けを見切って、的確に一本を奪います。子どもに対しても、彼の思いと言いつとをしつかり見切ってから、叱るべきは叱り、褒めるべきは褒めることです。

子どもに小言を言いたくなったら、まず子どもと正対して、目を見合うことです。そして、不用意な発言は抑えて、心をこめて話しかけることです。まず、親が真剣であることをわからせるのです。

親が真摯な態度で子どもと対峙すれば、子どももまた、親に対して真剣に向き合おうとしはじめます。こうしてやつと、まっとうな対話が始まるのです。対話が成り立ちさえすれば、親は子どもにとつて最も頼もしい味方になります。やがて、子どもは何くれとなく親に相談するようになり、食事の席にも戻ってくるはずです。

ある小学校の先生から、こんなお話をうかがいました。その先生の学級は一時期、いま話題の「学級崩壊」に近い様相を呈していました。あるとき、先生は「こんな君たちを見たら、お父さんやお母さんは嘆くだろうね」とふともらしました。たちまち、「ないないって。俺たちのことなんか気にしてないって」「親がいろいろ言うのは自分のためだよ」という答えが返ってきました。そこで先生は「親の思い」を自分の体験を交えながら時間いっぱい語り続けました。いつの間にか生徒たちは静かに聞いていました。不思議なことに、そのときから荒れる学級が落ち着きを取り戻したということです。

あなたの、子どもとの対話の様を思い出してみてください。もし、二人の間に溝があるとすれば、きっとあなたは、相手の目を見ていないことに気がつくはずです。仕事をしながら、あるいはテレビを見ながら、うわの空で、気分のおもむくままに、子どもの相手をし、あるいは叱っていたはずで、子どもは敏感にあなたの態度を見切り、そして、あなたを味方ではないと思うようになったのです。

家庭愛和の実践は、まず、家族一人一人と真摯に対峙するところからはじまるのです。